

ラモンの再評価をめざして

平田 渡

腹ちがいの双子の兄弟

ギヨーム・アポリネール（一八八〇ローマ―一九一八パリ）という不思議な系が、マリ―・ローランサン（一八八五パリ―一九五七同地）、堀口大學（一八九二東京―一九八一葉山）、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（一八八八マドリッド―一九六三ブエノスアイレス。スペイン語圏での通称はラモン、本稿ではそれに従う）の三人を結びつけている。

アポリネールは、知りあつた頃はまだあどけなさの残る画学生だつたマリ―・ローランサンを素晴らしい画家に育てあげ、婚約するに至つたが、愛するゆえの苦勞はむくわれず、あつけなく棄てられる。『動物詩集』の中の「鳩」と題する詩で、つぎのように本音を吐露している。

鳩よ 基督を生んだ

愛よ 聖靈よ

ラモンの再評価をめざして

私もお前のやうに

一人のマリイを愛してゐる

ああ かの女と夫婦になりたい⁽¹⁾

また、堀口大學の訳詩集『月下の一群』に収められた有名な「ミラボオ橋」では、マリ―・ローランサンからうけた失恋の痛手を冒頭でこう歌いあげている。

ミラボオ橋の下をセエヌ河が流れ

われ等の戀が流れる

わたしは思ひ出す

悩みのあとには樂たのしみが來ると

日が暮れて鐘が鳴る

月日は流れわたしは残る

(以下略)⁽²⁾

しかし、「あらゆる画家が女らしさを絵にしようともがいたけれど、発見できたのはマリー・ローランサンだけである」『Todos los pintores habían luchado por alcanzar la feminidad y sólo Marie Laurencin la ha encontrado』⁽³⁾とラモンに言わしめた女流画家のほうはといえば、あつさりオットー・フォン・ヴェツチエン男爵という若いドイツ人画家と結婚しドイツ国籍をとり、アポリネールは赤毛のジャクリヌと夫婦になった。マリーは、第一次世界大戦が勃発すると、フランスを逃がれ、ほぼ四年にわたりマドリッドに滞在することをよぎなくされた。かの女がラモン主宰の文芸サロン、ボンボに出入りし、私邸に招かれたり、知人のスペイン人画家ベニャに頼まれて堀口大學に会ったりしたのはその間のことである。

アポリネールのかつての恋人はラモンの家を訪れ、書齋に案内されたとき、「まあ、アポリネールの仕事部屋にそっくりだわ」とため息まじりに感想を洩らした。

さらに、第一次大戦からその後にかけて永らくスペインで暮らした、立体派キュビスムのフランス人画家、ロベール・ドゥローネー（一八八五パリ―一九四一モンペリエ。ソニア夫人も画家）は、多少の皮肉をこめて、「あなたはスペイン人のアポリネールですね」とラモンを評したという。

いずれも、ラモンがアポリネールを前衛主義の第一人者と見立て

て、『イスム集』*Ismos*の冒頭にすえて論じた「アポリネーリズム」*apollinerismo* からの引用だが、当のラモンは狂喜するよりも、空恐ろしくなったとのべている。「腹ちがいながら、なんとなく双子の兄弟ではないかという気がしたからだ。同様の思いは、ずっと味わったことのない極上のムール貝のような存在だった、マックス・ジャコブに対しても抱くようになった」*De algún modo resultábamos gemelos que no hubiesen estado nunca en el mismo vientre* (Después me había de pasar lo mismo con Max Jacob, que siempre ha de ser para mí el mejillón desconocido.)⁽⁴⁾とつぶづけている。

けれども、じつさいにラモンがアポリネールに会ったのは、一九一六年十二月三十一日のことだった。この年の三月、戦争にあこがれていたアポリネールは志願兵として第一次大戦に加わり、頭部に重傷を負ったが、大晦日にパリのメーヌ街にあるパレ・ドルレアンで、ポール・デルメラの若い詩人の発案によって、アポリネールの『虐殺された詩人』出版を祝う大宴会がひらかれた。ピカソ、ジャン・コクトー、ピエール・ルヴェルデイ、ブレイズ・サンドラール、ポール・フォールからアンドレ・ジッド、ジュール・ロマンまで、新旧の錚々たる面々が大挙して押しかけ、思わぬ乱闘さわぎまで起きたが、アポリネールにとっては晩年の最良の日になった。ラモンがアポリネールの面晤の栄をえたのは、この祝賀会に招かれたときである。

それが契機で、ラモンはアポリネールの遺稿詩集『そこに在る』
Nôvaの「序」を任されることになった。のちに『イスム集』に収
められた「アポリネーリスム」を仏訳したものがそれである。編集
を担当した、アポリネールの親友で伝記作者のジャン・ロワイエー
ルは、「序」の出来についてそれなりの評価をくだしてくれたとい
う。

ラモンが、アポリネールとマックス・ジャコブ、とくに前者を渴
仰していたことはまぎれもないけれど、『グレゲリーア』を読んだか
ぎりでは、『アルコール』（一九二二）や『カリグラム』（二八）といっ
た詩集からの影響があるように思われぬ。むしろ、ピカソに代
表される当時の革新的な絵画を擁護した『立体派の画家たち』（二三）
や『新精神と詩人たち』（二八）に見られる前衛思想を学んだように
思われる。

ちなみに、ラモン自身が師表と仰いだことを公言しているのは、
シルベリオ・ランサ（二八五六マドリッド、一九二二ヘタフェ）とアソリ
ン（二八七三モノバル、一九六七マドリッド）のふたりのスペイン人作
家だけである。アソリンや哲学者ミゲル・デ・ウナムーノが属した
《九八年の世代》の作家たちの師でもあった前者からは、自由の精神
とユーモアを、後者からは日常の細部をすくいあげる姿勢を教わっ
たのである。

一方、スペイン公使として赴任した父九萬一くまいちのあとを追ってマド
リードにやってきた堀口大學だが、かれは滞在中にペニャという若

いスペイン人画家から、戦乱を避け、スペインの首都にアトリエを
かまえていたマリー・ローランサンを紹介された。一九一五年一月
二十日のことである。そのときのいきさつは、随筆集『季節と詩心』
所収の「キュビズムの女神」にくわしいが、話がマリー自身の絵画
からアポリネールに転じたくだりをつぎに引く。

「——貴君は詩人ですつてね。私は詩と詩人が大好きです。妾は畫
家よりも詩人に多くの友人を持つています。妾の作品は詩人にいち
ばん愛されます。妾の畫が詩の世界に近いからでせう。若い詩人の
ギイヨーム・アポリネエルね、御承知でせう。作品をお讀みになつ
たことがおありでせう。面白いものを書きませう。あれは私の親友
ですよ。今ではね。以前は親友以上だったのです。彼と妾とは婚約
の間がらだったのです。一年以上もですよ。それなのに、よく知り
合つて見ると、夫婦になれぬ二人だと妾が感じたので止したので
す」

まだ二十三歳だった堀口大學は、このときはじめて当時のフラン
スにアポリネールという詩人がいることを教えられたのである。そ
れからちようど十年後に第一書房から上梓されることになる『月下
の一群』には、六十六人の詩人の作品が紹介されたが、その中でア
ポリネールが重要な位置を占めていることは言うまでもない（それ
にマリー・ローランサンの詩も数篇ふくまれている）。すでに引用し
た「ミラボオ橋」と同様よく知られているのは「狩の角笛」だろ
うか。

思ひ出は 狩の角笛

風のさなかに聲は死にゆく^⑥

ラモンの『グレゲリーア』に見えかくれする抒情的な趣きをたたえた作品を思わせなくもないが、それはともかく、堀口大學は、マドリッドでマリー・ローランサンから絵の手ほどきをうけたり、古道具好きの閨秀画家のおともをして骨董屋や蚤の市^{ラストロ}に出かけたりした。そして七年後にパリで再会をはたしたとき、マリーから小さな紙片をさし出されたのである。そこには、「日本の鶯」と題するつぎのような新作の詩がしたためてあつた。

彼は御飯を食べる

彼は歌を歌ふ

彼は鳥です

彼は勝手な氣まぐれから

わざとさびしい歌を歌ふ^⑦

堀口大學がこの「日本の鶯」という美しい呼称をよるこび、詩や翻訳の仕事をするための励みにしたことは、想像にかたくない。

堀口大學は、マリー・ローランサンの口からアポリネールという詩人の存在を教えられたが、そこから芋づる式に、アンドレ・サルモン、マックス・ジャコブ、ピエール・ルヴェルデイ、ジャン・コ

クトーといったエスプリ・ヌーヴォー(新精神)を体现する詩人たちを知ることになった点は見逃がせない。おかげで、当時のフランス詩壇の新風が余すところなく『月下の一群』に吹きこまれることになったのである。

アポリネールについて堀口大學とラモンに熱く語ったマリー・ローランサン。アポリネールの『詩集』とマリー・ローランサンの『詩集』、それにラモンの『乳房』を翻訳し、わが国に紹介した堀口大學。アポリネールの遺稿詩集の序文と、『イスマ集』の「妖精主義」Zelusmo の項でマリー・ローランサンを描いたラモン。ラモンが堀口大學と知り合う機会にめぐまれなかったことはかえすがえすも心残りだけれど、これら三人は、アポリネールをとおして奇妙な縁^{えにし}で繋がっているのである。

非政治的人間の悲哀

一九三六年のある日、ラモンはマドリッドのアルカラ大通りにあるカフェに腰をおろしていた。すると、年老いたボヘミアンの文士が体に弾倉帯をまき、肩に銃をかついで歩いてゆく姿が目にとまった。そのとき、ラモンは、三一年に訪れたことのあるアルゼンチンに逃がれることを思い立った。つまり、政治に疎かったせいで、老作家の恰好を目のあたりにするまで、うかつにも戦争が間近に迫っていることに気づいていなかったのだ。

ラモンは、三二年アルゼンチンに講演旅行に出かけたとき、親交

があつたホセ・オルテガ・イ・ガセー（一八八三マドリッド～一九五五同地）の命名にかかる、コスモポリタ的な文芸誌《スール》*Sur*の創刊に立ち会う一方、ユダヤ系のアルゼンチン人女性、ルイサ・ソフォヴィッチを見そめ、恋におち、手廻しのよいことにスペインに連れ帰っていたが、かの女とともに時を移さずアルゼンチンに亡命した。ペンクラブ会議に出席するためというもつともらしい口実をつくつて。

以後、マドリッドをこよなく愛した作家は、望郷の念にかられながら、ブエノスアイレスのイポリト・イリゴリエン街で六三年に亡くなるまでひっそりと暮らした。もつとも、四九年に、一度だけ帰国している。このとき、経緯はつまびらかにしないが、フランコ総統派の知識人から歓迎会に招かれた。ひさしぶりに祖国の土を踏み、感慨も一入ひとしほだったのはわかるけれど、のこのこ出かけていった迂闊さが、いかにもノンポリのラモンらしいところである。その結果、共和派側の作家や詩人たちの容赦ない批判をあびることになった。

ラモンはグレゲリーアをはじめとする、エッセイ、小説、戯曲、伝記といったさまざまな文学の分野で、ゆるぎない革新的精神をもつてスペイン前衛派の先頭を走りつづけた詩人・作家である。ギリエルモ・デ・トーレ（一九〇〇マドリッド～七一ブエノスアイレス）とラファエル・カンシーノス・アッセンス（一八八三セビリア～一九六四マドリッド）らが唱え、ヨーロッパ滞在中の若き日のホルヘ・ルイス・

ボルヘス（一八九九ブエノスアイレス～一九八六ジュネーヴ）がかかわり、スペイン語圏での前衛詩運動の嚆矢となったウルトラリスモ *ultraismo* 運動や、ラファエル・アルベルティ、フェデリコ・ガルシア・ロルカ、ホルヘ・ギリエン、ビセンテ・アレイクサンドレ、ペドロ・サリーナスのような名だたる詩人たちを輩出した、《二七年度の世代》に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。

オルテガは、前衛という言葉をいっさい使わず、ヨーロッパに澎湃として起こった新しい文学や美術を論じた『芸術の非人間化』（一九二五）の中で、「リアリズムをぎりぎりまで突きつめ、リアリズムを乗り越えた恰好の例といえ、いずれも拡大鏡を通して日常の瑣末なものを眺めたものだが、ブルースト、ゴメス・デ・ラ・セルナ、さらにはジョイスがそうである」と述べている。ここでは、ラモンが、二十世紀を代表する名作『失われた時を求めて』と『ユリシーズ』をそれぞれ物したブルーストとジョイスと肩を並べているのである。オルテガが単なる仲間褒めのためにこのような言葉を弄するとは考えられないから、ラモンの力量のほどがご想像いただけるかもしれない。

しかし、ラモンが三六年にアルゼンチンに亡命し、四九年に一時帰国したあと、スペインのみならず、ラテンアメリカの作家や詩人、それに批評家たちは総じて冷やかな目をむけるようになった。そこには、ラモンのノンシヤランな政治姿勢が影を落としている。じつは政治は作家を墮落させるとラモンは考えていたのだが、そのせ

いでふだんは無関心な態度を示していた。おかげで、非政治的な人間、あるいは体制派コンフォルミストと見なされたのである。文学においてはつねに革新をめざしていたラモンが、こと政治となると尻ごみする点については、崇拜者たちも納得がいかかったようだ。メキシコの詩人で文明批評家のオクタビオ・パス（一九一四メキシコ・シテイ〜九八同地）は、そうした事情にもきちんと目配りしながら、つぎのようにラモンを評価している。

「私にとってラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナは偉大な作家である。（中略）現代精神モダニティというものが彼の口を通して語られた時期がある以上、賞讃をあげせられるのはしごく当たり前の話である。作品はまったく斬新だったし、それは現在も変わっていない。数日前、いわゆるポップ・アートなるものを目にしたとき、ふとラモンのことが脳裏をかすめた。かれの本はとにかく生きがいいうえに懐が深いので、読んでいると死さえもがすこやかなものに思えてくるのだ。このままゴメス・デ・ラ・セルナの作品を忘れていいものだろうか。ばかげた黙殺をつづけているスペイン人とイスパノアメリカ（スペイン系アメリカ）人を許していいものだろうか。スペインとイスパノアメリカの現代詩は、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ、それにウイドブロ、タブラーダ、マセドニオ・フェルナンデスといった数人の詩人たちが生み出したものなのである。現代詩は、散文、それにフランス語や日本語で書かれ、散文性とコスモポリタンのものを兼ねそなえた異端として生まれた。

「もうひとつの現代精神の特徴は、ジャンルのあいだの垣根をとり払おうとする傾向が見られる点である。ジョイスの作品は小説だろうか、詩だろうか。バリエ・インクランは詩と戯曲と小説の境界線をこわした。ゴメス・デ・ラ・セルナは、この特徴の極北に位置している。かれの作品はあらゆる様式に変わりうる、柔軟性をそなえた巨大なカタマリなのである。（中略）ラモンの天才は絵画の世界のピカソを彷彿とせると言っている」

Para mí es el gran escritor (...) hubo un momento en que la modernidad habló por la boca de Gómez de la Serna. Fue tan nuevo que lo sigue siendo: hace unos días, al ver unas obras del llamado *pop-art*, pensé intuitivamente en Ramón. Fue tan poderoso y generoso que la muerte misma me parece, en sus páginas, saludable. ¿Cómo olvidarlo y cómo perdonar a los españoles e hispanoamericanos esa obtusa indiferencia ante su obra? Con Ramón Gómez de la Serna y unos cuantos más — Huidobro, Tablada, Macedonio Fernández — nace la poesía moderna de España e Hispanoamérica. Nace hablando en prosa y en francés y japonés. Nace como una doble herejía: un prosaísmo y un cosmopolitismo.

Otro rasgo de la modernidad es la tendencia a borrar las fronteras entre los géneros. Las obras de Joyce, ¿son novelas o poemas? Valle-Inclán rompe los límites entre poesía, teatro y

novelas. Gómez de la Serna extrema la nota: su obra es una inmensa masa maleable que adopta todas las formas sin fijarse en ninguna. (...) El genio de Ramón me hace pensar en la pintura: Picasso.

市民戦争の際、ヘミングウェイ、ジョージ・オーウェル、アンドレ・マルローは人民戦線側の国際義勇軍に身を投じて戦い、ガルシア・ロルカはファシスト側に虐殺され、オルテガ、作曲家マヌエル・デ・ファリヤ、詩人アントニオ・マチャードとペドロ・サラリーナスは亡命し、ピカソは『ゲルニカ』を描いて戦争の惨禍を告発した。そうした著名な芸術家たちの行動をうけて、戦後から現在にいたるまで、作家や詩人に限らず芸術家は、政治的に共和派かそのシンプでないと容認されない空気が世界中に瀰漫してしまっびまんた。ラモンはその影響をもろにかぶったように思われてならない。出典はさだかではないが、レーニンのもつと言われる言葉を引いて、ガルシア・マルケスが自伝小説 *Vivir para contarla* の中で書いているとおりの事態が起きたのである。「きみが政治に口を出さなければ、きつと最後には政治のほうがかきみに口を出すようになるだろうね」
Si no te metes con la política, la política terminará metiéndose contigo.
ともかくも、さきほど紹介したオクタビオ・パスの再評価を求め、声が、スペインやイスパノアメリカだけでなくわが国にも広がることを願わずにはいられない。

ラモンの再評価をめざして

考えてみれば、ニカラグア生まれの詩人ルベン・ダリーオ（一八六七メタバ―一九一六レオン）が、一八八〇年代から一九一〇年代半ばにかけてフランスの高踏派や象徴派の詩に範を仰ぎながら、近代派（モデルニスモ）modernismo と呼ばれている詩の革新運動を展開したが、この近代派の運動がそのまま現代詩につながったわけではなかった。これまで文学史において見落とされがちだったけれど、近代派から現代詩への橋渡しの役目を担った詩人たちが存在した。その中でとりわけ重要な位置を占めているのがゴメス・デ・ラ・セルナなのである。

ラモンの作品を読みたいばかりにスペイン語を学んだというフランス人作家ヴァレリー・ラルボー（一八八一ヴィシー―一九五一同地）に言わせれば、「夜のしらら明けまでもつた、マドリードにあるラモン邸の窓あかりは、ヨーロッパという船の舳先へそを照らす光のように輝きを放っていた」*La ventana de Ramón iluminada en el alba, allí en Madrid, brilla como una luz de navío en la proa de Europa* のである。

グレゲリーア由来

十代のラモンが文学に手を染めた頃、マドリード雀は、「あいつは思いついたことをすべて口にし、口にしたことをすべて書き、書いたものすべてを発表し、発表したものすべてをひとに贈呈している」*Es un hombre que dice todo lo que se le ocurre, escribe todo*

lo que dice, publica todo lo que escribe y regala todo lo que publica. と憎まれ口をきいた。うわさ話ながら憶えやすい尻とり形式で、豊饒な作品を生みだすラモンの作家としての資質をきつちり預言している点が面白い。

グレゲリーア Gregueria が、一九二二年二月三日、新聞の刷新をめざして創刊されたトゥリブナ Tribuna 紙に掲載され、多くの読者の目にふれたとき、作品の出来そのものよりもネーミングが不評だった。もつとましなものに変えるように、読者から苦情がよせられ、中には購読をやめるといふ強硬な声もまじっていた。そればかりか、モロッコ在住のスペイン人向けに配送された包みは未開封のまま返品されてきたのである。もちろん、ラモンは編集長の要請にはとりあうことはなかった。

そのうち、グレゲリーアの模倣者が続出するという事態がもたらがった。ラモン自身は、そのときはもう悲しむより笑うしかなかった。ともかくも、以上のようにグレゲリーアが波瀾ぶくみのうちに船出したことだけはまちがいない。

さて、肝腎のグレゲリーアという名前の由来である。フランス語の幼児語で「お馬」を意味するダダイスムのダダ dada は、トリスタン・ツアラが偶然ひらいた辞書で見つけた言葉だったといわれているが、グレゲリーアという言葉も似たような情況でラモンが目に留めたものである。

ラモンによれば、古くは「母豚についてゆく仔豚たちの鳴き声」

という意味もあつたらしいが、今では「騒ぎ、ざわめくような叫び声」といったほどの語義をもつ。そこから、グレゲリーアで、「生きものがふと洩らすざわめくような叫び声、静物の叫び声」es lo que gritan los seres confusamente (...), lo que gritan los cosas をとりあげていることを考えれば、あながちこじつけとは言えないだろうと解釈したのである。ほとんど廢語に近かったことも、新しい意味をはらませるには好都合だった。以下は、ラモン自身の言葉である。

「グレゲリーアに出会ったことよって、幸運が舞いこんできた。グレゲリーアのおかげで、生きてこられたし、講演に出かけられたし、旅行ができ、世界で通用する合言葉を手に入れたのだ」

El encuentro con la Gregueria fue lo que me trajo la suerte.

Gracias a las Greguerias he vivido, he conferenciado, he viajado, he tenido contraseña universal.

はじめに一冊の本にまとめられた『グレゲリーア』(一九二七)をひもとくと分かるが、初期の作品はとにかく長いうえに冗漫なものが目立つ。中には半頁にわたるようなものが含まれている。そして、「グレゲリーア同士がくつつかないように」、十三回の休憩時間もつけられ、そのたびに短篇小説が挿入されているのである。そこに「目ざまし時計」Los despertadores や「生き抜く女たち」Las supervivientes のような佳作が混じり、趣向として悪くないけれど、グレゲリーア自体の出来はいまひとつ。

ラモンがグレゲリーアを自家薬籠中のものにするまでには、もう

少し時間がかかった。のちに「^{メタファー}隠喩+^{ユーモア}諧謔」グレゲリーア」という等式をつくりあげ、隠喩の重要性に着目するが、この時を待たなければならぬ。それ以降、グレゲリーアは年々、簡潔な、切れ味の鋭いものになり、本来の持ち味である短詩型の散文作品に近づいてゆく。ラモンが意識していた日本の俳諧のように、一行ですむものも現われはじめるのである。

ラモンの作品は、グレゲリーア発見後、小説であれ、演劇であれ、エッセイであれ、伝記ものであれ、その精神に満たされていると言っている。そして、伝統的なジャンルの壁を突き崩すものになった。それを自らラモン主義 *ramonismo* と称したのである。

「ラモンと比べられる文学的な野望をほらんだ冒険をさまざまなかたちで提供できたのは、ルネサンスだけである。『セレスティーナ』や、ラブレールとベン・ジョンソンの作品、あるいはロバート・バートンの『憂鬱の解剖』にふんだんに見られる格言やことわざといえども、おそらくラモンの作品ほどは意欲的ではなかったのではないだろうか」*Sólo el Renacimiento puede ofrecernos lances de ambición literaria equiparables al de Ramón. ¿ Son menos codiciosas acaso que la escritura de éste las enumeraciones millonarias que hay en la Celestina y en Rablais y en Johnson y en 《The anatomy of Melancholy》 de Richard Burton? ¿ 喝破したのはボルヘスだが、まことに的を射た立言といわなければならない。*

(外国語教育研究機構・教授)

ラモンの再評価をめざして

註

- (1) 堀口大學『水かがみ』東京 昭和出版 昭和52年6月20日 *引用は『堀口大學全集6』東京 小澤書店 昭和57年8月30日 612-613頁による。
- (2) 堀口大學『月下の一群』東京 第一書房 大正14年9月17日 *引用は『堀口大學全集2』東京 小澤書店 昭和56年10月30日 18頁による。
- (3) Gómez de la Serna, Ramón—*Ningúnismo en Ismos*, Editorial Poseidón, Buenos Aires, 1943, pág. 241. *ただし、元版(1931)は *Cubismo y otros ismos* という題。
- (4) *Ibid.*—*Apollinierismo en Ismos*, Editorial Poseidón, Buenos Aires, 1943, pág. 20.
- (5) 堀口大學『季節と詩心』東京 第一書房 昭和10年8月8日 *引用は『堀口大學全集6』東京 小澤書店 昭和57年8月30日 156頁による。
- (6) 堀口大學『月下の一群』東京 第一書房 大正14年9月17日 *引用は『堀口大學全集2』東京 小澤書店 昭和56年10月30日 30頁による。
- (7) 堀口大學『季節と詩心』東京 第一書房 昭和10年8月8日 *引用は『堀口大學全集6』東京 小澤書店 昭和57年8月30日 163-164頁による。
- (8) ホセ・オルテガ・イ・ガセー「芸術の非人間化」神吉敏三訳 東京白水社 一九七〇・四・二八 『オルテガ著作集3』所収 *71頁を参照させていただいた。
- (9) Paz, Octavio—*Obras Completas 3 Fundación y desidencia DOMINIO HISPANICO*, Círculo de Lectores, Barcelona, 1991, pág. 286.
- (10) García Márquez, Gabriel—*Vivir para contarla*, Grupo Editorial Random House Mondadori, Barcelona, 2002, pág. 248.
- (11) Torre, Guillermo de—*Medio siglo de literatura en Gómez de la*

- Serra, Ramón—*Anatología cincuenta años de literatura*, Editorial Losada / Espasa-Calpe Argentina / Editorial Poseidón / Emecé Editores / Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1955, pág. 27.
- (12) *Ibid.*—*Ibid.*, pág. 30.
- (13) *Ibid.*—*Teoría de las Greguerías* en Gómez de la Serna, Ramón—*Anatología cincuenta años de literatura*, Editorial Losada / Espasa-Calpe Argentina / Editorial Poseidón / Emecé Editores / Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1955, pág.126.
- (14) *Ibid.*—*Ibid.*, pág. 125.
- (15) Borges, Jorge Luis—*Apendice Algunas opiniones españolas, americanas y extranjeras sobre mí* en Gómez de la Serna, Ramón—*Automoribundia (1888-1948)*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1948, pág. 791.

主要参考文献

- ギヨーム・アポリネール 『虐殺された詩人』 窪田般彌訳 東京
白水社 一九七五・九・一〇
- ギヨーム・アポリネール 『遺稿詩篇』 堀口大學訳 東京 昭森社
一九七二・九・一五
- 一〇〇三・一一・一〇
- Umbal, Francisco—*Ramón y las vanguardias*, Espasa-Calpe, Madrid, 1978.

Seeking A Reevaluation of Ramón

Wataru Hirata

Ramón Gómez de la Serna(1883-1963), Spanish avant-garde writer, went into exile in Argentina in 1936, not returning to Spain until 1949. Upon his return, intellectuals of General Franco's party invited Ramón to a welcome reception that, in a typical display of his apolitical nature, he attended, and never spoke out against Franco's regime. This action—standard for a man who believed politics corrupted writers—offended many writers, poets, and critics in Spain and Latin America who oppose Franco. They came to think of Ramón as not only apolitical, but as a conformist locked in an “ivory tower”, a perception that hurt his reputation despite his diverse contributions to Spanish—and world—literature.

During the Spanish Civil War(fought from 1936 to 1939 between Republicans and Franco's Nationalist Forces), Ernest Hemingway, George Orwell, and André Malraux joined the International Brigades that were fighting for the Republican Popular Front; Federico García Lorca was murdered by Franco's facists; the philosopher José Ortega y Gasset, the composer Manuel de Falla, and the poets Antonio Machado and Pedro Salinas fled from their country; and Pablo Picasso painted *Guernica* to denounce the horrors of war. It was a difficult time to be accepted who did not espouse Republican values or at least sympathize with the Republican cause. I cannot help but think that Ramón was victimized because of his apolitical indifference, thereby stunting his reevaluation.

Such a reevaluation of Ramón—in Japan as well as in Spain and Latin America—is overdue. In this paper, I will make a case for Ramón, who, in my opinion, played the most significant role in bridging the divide between the poetic reform movement of Modernismo(championed by poets like Nicaraguan Rubén Darío from 1880s to the mid 1910s)and modern poetry.